

貴重な経験

昭和五十四年度 六年 男児

「やった。」ついに二千円たまったー。この時、ぼくは跳び上がるほどうれしかった。おばさんからいただいた五百円でちょうど二千円。ぼくはお金を机の上に置くと、じっとにらんだ。ひき出しから、かわのさいふを取り出した。

ぼくにはさいふが三つあるが、今日とはびきり上等のかわのさいふを使うことにした。なしろ、大事なお金を入れるんだから。

さいふをポケットに入れると、ぼくは玄関を飛び出しお母さんと東大町のジャスコに向かって自転車を走らせた。自転車をカいっぱいこいでいるのに、なぜか目的地までの道が遠く感じた。ジャスコに着くと、大またで階段をのぼり、ドアを体でおし開けた。

おもちゃ売り場までの道はよくわからなかったが、とにかくおちゆうで走った。ようやくおもちゃ売り場に着くと、とりあえず千百円だけさい

ふから取り出し、片手にしっかりとにぎりしめた。プラモデルの箱がたなの中にぎっしりつまっている。ぼくのめあては、リモコン式の動く戦車だ。あちこち探しているうちに、目がぴたりととまった。「あつたー。これだ。まちがいない。」もっとよく見るために、顔をぐっとつき出した。その箱の名ふだに「ドイツ陸軍、シャイアン戦車リモコン式」とはっきり記されている。胸がどきどきする。たなから降して箱を開けてみると、まず、ピカピカ光るギヤボックスが目飛びこんできた。それを見たぼくは、まるでさいみん術にでもかけられたようにじっと見つめた。はっと気が付いて、ふたを閉め、レジに持ちこんだ。レジにいたのは数秒のように感じられた。

家に帰って部屋に入った。戦車のことでいっばいである。こたつの上に大きな箱をのせ、さっそく開けてみよう。なかみは分っているのだが、なぜかドキドキした。

しんちように包み紙を取りふたを開けた。「はっ。」と大きな声を出してしまった。

「ない。」

ないのだ。コードがないのだ。コードがなければ戦車は動かない。自分の目をうたがうように、もう一度箱の中をさぐった。やっぱりない。どうしたことだ。頭の中がおかしくなりそうだ。

兄さんが部屋に入ってから来たので話した。

「返品だな。こりゃ」

と、あたりまえのような口調だ。ぼくはあきらめられずどうしようかとまよった。この日は、気持ちが悪くつかず、くやしかった。次の日、あきらめ七割の気持ちで返品におかされた。雨の日だった。おちゅうで店内に入った。店員は買った時と全然ちがうムードだった。かっどくる暑さだ。店員に説明して千八十円がもどってきたが、全然いい気持ちになれない。自分は損得なしの気持ちにならないのだ。それもそのはず、あれだけ苦労してためたお金なんだから。レジの人にわたしたのと同じ金額なのに、返ってきた千円さつ一枚と十円玉八枚はまるっきり手ごたえがない。同じお金のようには思われなかった。

二千円たまった時ほど、お金のねうちや大切さを味わったことはないが、レジでお金を返された

時ほどそまつに見えたことはない。自分の気持ちもあつという間に反対になったことも経験したことがない。もう二度とこんなまちがいはおこしたくない。あの時、ぼくがあわてずにしっかり確かめていればこんなことにはならなかった。

お金がもどってから考えてみた。今考えてみると、あんなにほしいと思っていたりモコン式の戦車が、本当に必要だったんだろうか。そうだ一年もしないうちに、あきてしまいか、こわれてしまいかどっちかだろう。こんなことを思っていたら、戦車を買おうとしていた時の自分と、今の自分とは、大きな違いがあることに気づいた。これからは買いたい物をするときには、何回も考えて、どうしても欲しい物がどれだけ役に立つのか、本当に何年も使っていける物なのか、じっくりと考え、あわてて買わないことだと思った。最初は、くやしくて腹が立ったが、今になってみるとよかったし、お金の大切さもよくわかったような気持ちだった。